

## ロレンツォ・デ・メディチ『我がソネットの註釈』 に関する考察

土屋 美子

ロレンツォ・デ・メディチ (Lorenzo de' Medici, 1449-1492) の創作活動の特徴づけるのは、15 世紀後半という人文主義の時代に専ら俗語、すなわちイタリア語で執筆し、多岐にわたる主題を扱い、レジスターを異にするさまざまなジャンルに挑戦したことである。本稿で研究対象とする『我がソネットの註釈』(*Comento de' miei sonetti*) は、イタリア語史において注目に値する作品であるが、その考察において必要なことは、この時代の言語状況の把握である。

フィレンツェ共和国の実質上の支配者であった作者は、「私がその中で生まれ育まれた言語で書いたからといって、誰も私を非難することは出来ない」と述べているが、彼の母語は当時、「俗語の危機」と呼ばれる状況に陥っていた<sup>1)</sup>。ラテン語に対する概念として用いられる「俗語」に対する共通の認識は、同時代のその土地のすべての人々に理解される言語ということであるが、15 世紀には古典に対する憧憬が常軌を逸したラテン語への傾倒をもたらし、ラテン語こそが完璧さの模範と看做されていた。14 世紀にダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョによって築き上げられた俗語の栄誉は消え失せ、文化を伝播する言語としての俗語の威信は著しく後退していたのである。それ故、ここで認識すべきことは、イタリア語史において他に例を見ない特殊な時代であった 15 世紀に俗語で創作することには、その他の世紀の場合とは異なる意味があるということである。

本稿では、『我がソネットの註釈』の意義について解明するために、作者

が「序」で提示している3要素に注目して考察する。第1に、さまざまな韻文形式の中からソネットを選択して愛を主題とする詩に自身で註釈した作者の見解を分析し、第2に、彼が古代ギリシャ以来の哲学、文学、自然科学などの著述をどのように受容したかを吟味する。そして第3に、作者の政治的立場を視野に入れて俗語擁護の背景を検討することにした。

## 1. 『我がソネットの註釈』の「序」

ロレンツォは「序」の冒頭で、予想される以下の非難が執筆を躊躇させていたと述べ、それらに対する反論を繰り広げる。第1の非難の理由は、自分自身の作品に註釈することであるが、彼は愛の主題を含む詩に註釈したダンテの例を挙げて反論する。『我がソネットの註釈』の各章は韻文と作者自身の註釈で構成されているが、このような形式の模範とされるのは、ダンテの『饗宴』(Convivio) や『キタ・ノワ』(Vita Nuova) である。しかし、『我がソネットの註釈』という表題そのもののの中に、先行作品とは異なる視点で創作を目指した作者の意図が示されている。ロレンツォは「序」で詩論を繰り広げ、彼が選択したソネットが俗語の韻文形式の中で最も難しいという結論を引き出すのである。

この作品で際立っているのは、哲学者、詩人、科学者たちの権威を抛り所として自説を正当化する作者の姿勢である。ここで彼は古代ギリシャの哲学者に依拠して、自作に註釈することは慢心ではなく、解釈のための秘訣を作者本人が読者に与えるのは努めであると主張する。ロレンツォは、すべての人が世の中で最も評価される事柄を遂行し得るにふさわしく生まれつくわけではない故、いかなる努めにおいて人類により役に立つことが出来るかを自分自身で評価すべきであると主張する<sup>2)</sup>。ここで彼はプラトンが『国家』で述べている各人に生来的に存する相違だけでなく、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』で説いている共同体への人間の貢献も抛り所として、社会の中での人の職業や任務における多元論を展開させている<sup>3)</sup>。ここには2人の

哲学者たちの見解が同時に認められるが、これは散文の叙述において均衡を保つというロレンツォ独特の手法である。

第2の予想される非難の理由は、題材・主題の大部分が愛の情念であるような詩を創り、その註釈に時間を費やしたことである。彼は、人々の間の愛は非難すべきものではなく必要なもので、それは人間に価値ある卓越したことを志向させ、我々の魂の中に潜在的に存在するあの徳を覚醒し実行に移させる原因であると反論する<sup>4)</sup>。ここで注目すべきなのは、ロレンツォが「註釈では専ら、神学的あるいは哲学的な事柄、大いなる効果をもたらす事柄、我々の精神を教化し慰めるための事柄、人類にとって有益な事柄を扱う」と表明していることである<sup>5)</sup>。

第3の予想される非難の理由は、母語である俗語でソネットを創りそれに註釈したことであるが、彼は熱意を込めて俗語擁護のために反論する。「ブルーニに始まり、この世紀の主要な人文学者を巻き込んで論じられてきた俗語に関する諸論の到達点」とされるこの反論は、「序」の最も重要なくだりである<sup>6)</sup>。

さて、ロレンツォは自身が選択した韻律形式ソネットの卓越性を正当化するために、その簡潔さに言及する。彼はここで哲学者の権威に依拠して、「プラトンの見解」では、「簡潔に明快に語ることは、人間においては驚嘆すべきことであり、殆ど神業である」と述べる<sup>7)</sup>。作者が経験を通して得られたものを重視しそれによって説得しようとする姿勢は、この作品の随所に見出されるが、自説の拠り所とするのは、多忙な公務の合間にさまざまな韻律形式の俗語作品を創作した経験である。微妙な題材のソネットを創るのが困難であるのは、この詩形の難解さと厳格さのせいであることは、経験上、容易に証明されると述べる。さらに、「ラテン語の詩が俗語のそれに比べてはるかに自由である」のは、「我々の言語（俗語）においては、[...] 韻を踏むという困難さも伴うからで、経験者ならわかるように、韻のせいで多くの美しい内容が損なわれ、容易に明解には語り得なくなる」と主張する<sup>8)</sup>。

彼はこのようにして、俗語による詩の創作が非常に困難で、その韻律形式の中でもソネットは最も難しく、それ故に値打ちがあるという結論を導き出すのである。そして彼は「オウィディウスがパエトンについて述べているように」と、『転身譜』に登場するパエトンの大胆な企てを示唆しつつ、「俗語詩において最も卓越したソネットを敢えて試みただけで、私には十分である」と語る<sup>9)</sup>。ここでロレンツォはソネット創作に挑戦した自身を、父である太陽神の車駕を操ろうとしたパエトンに重ね合わせている。ルネサンス人にとって誉れは最も重要なもののひとつとされていたが、ソネットの創作に挑戦することは、作者にとって困難な事柄に立ち向かうという誉れであったのかもしれない。

「序」は実に綿密に組み立てられた3要素で構成されているが、作者は予想される非難に対する反論を巧みに展開させる過程で、この作品で主張しようとすることを端的に浮き彫りにしているのである。

## 2. 知の集積——古代から同時代まで

既述のように、ロレンツォは「序」で「註釈では専ら、神学的あるいは哲学的な事柄、大いなる効果をもたらす事柄、我々の精神を教化し慰めるための事柄、人類にとって有益な事柄を扱う」と明言したが、『我がソネットの註釈』には古代ギリシャ以来の哲学、文学、自然科学などの知の遺産が重層構造をなしている。

この作品に対する同時代の人文学者たちの評価を伝えるものとして挙げられるのは、ポリツィアーノ (Angelo Poliziano, 1454-1494) の『選集』(*Silvae*) 所収の『ヌトゥリキア』の一節 (*Nutricia*, vv. 745-762) である<sup>10)</sup>。彼はロレンツォの他の作品については、題名を連想させる言葉を並べるに留まるが、『我がソネットの註釈』に関しては、部分的ではあるものの、内容を伝えようとする筆の運び方をしており、ロレンツォの数多い作品中で重要なものと認めているように思われる。

ピーコ・デッラ・ミランドラ (Giovanni Pico della Mirandola, 1463-1494) は 1484 年 7 月 15 日のロレンツォ宛ての書簡で、『我がソネットの註釈』を賞讃した後、アリストテレスの『自然学』、『魂について』、『倫理学』、『天界について』や、プラトンの『国家』、『法律』、『プロタゴラス』、『饗宴』を列挙する。そして、彼は以前にこれらの著作を読んだと述べ、「しかし、私は貴殿の書においては、より見事なもの、新たなものとして拝読いたしております」と所感を述べる<sup>11)</sup>。ギリシャ語に堪能であったピーコは、ここでアリストテレスやプラトンの著作と『我がソネットの註釈』との乖離を示唆しているように思われる。

さて、『我がソネットの註釈』にはフィチーノ (Marsilio Ficino, 1433-1499) の影響が随所に認められるが、彼は 1469 年にプラトンの『饗宴』の註釈書を著した。その後、彼自身によってラテン語からトスカナ語に翻訳されたのが、『愛について — プラトンの饗宴 — フィレンツェ人マルシリオ・フィチーノによるプラトンの饗宴に関する註釈』(以下、『饗宴註釈』と略記)である<sup>12)</sup>。フィチーノの哲学はイタリアだけでなく、その他の国の哲学のみならず文学、さらには文化全体に対して多大な影響を及ぼし、15 世紀から 16 世紀にかけての愛をめぐる論争のすべては、フィチーノの愛の哲学を出発点としたとされている<sup>13)</sup>。

フィチーノは『饗宴註釈』の冒頭で、この饗宴の日はプラトンの誕生日であると同時に没した日であり、古代のプラトン学徒たちすべてによってプロティノスとポルフェリオスの時代まで催されていたが、その後、1200 年もの間、催されることがなかったと記している。しかし、「遂に当代になって、令名高いロレンツォ・デ・メディチがプラトンの饗宴を復活させようとして、この宴を司る役をフランチェスコ・バンディーノに委ねた」のである<sup>14)</sup>。この饗宴では、「愛の饗宴と題されたプラトンの書」を読み終わった後、招かれた客たちの各人がそれぞれの話について解釈を述べることになったのである<sup>15)</sup>。『饗宴註釈』の第 7 話第 1 章「哲学者ガイド・カヴァルカンティの見

解と共に、語られたことすべての結論」では、カヴァルカンティについて、「この者は、愛について貴殿たちによって述べられたことを、自身の詩の中に簡潔にまとめた」と記されており、彼は哲学者、詩人として高く評価されている<sup>16)</sup>。

プラトンの『饗宴』をめぐる談論を交わす人文学者たちの輪の中心にいたロレンツォは、当時のフィレンツェで「最新」の哲学書であったフィチーノの『饗宴註釈』から多くの着想を得ている。ここで考慮に入れなければならないのは、フィチーノの解釈とプラトンの『饗宴』のテキストとの隔たりである<sup>17)</sup>。これに加えて、ロレンツォは「今のところは、プラトンによるとすべてのものが完成を見出し、最終的には神である至高美の中で安らぎを得るための手段であるあの愛は別にして、専ら、人間を愛する方に向かうあの愛について語ることにする」と述べている<sup>18)</sup>。ここで彼は、天上のウェヌスの領域には立ち入らないと表明しているのである。彼は古代の哲学者たちの見解やフィチーノの愛の理論を、独自の解釈の方法で自分の作品に当てはめている。彼のこのような手法とフィチーノによるプラトンの『饗宴』の解釈の方法が相俟って、ピーコに違和感を抱かせることになり、上述のような所感の表明になったのかもしれない。

『我がソネットの註釈』では、「ある女人」(シモネッタ・カターネオ)の死を悼んで創られた4つのソネットが、「我が婦人」が登場する第5章の前に置かれているが、この構成は作者の綿密な意図に基づいている。フィレンツェ中の人々に哀れを催させたシモネッタの死に言及する作者は、この現実社会で起きた事柄を寓意的、哲学的、象徴的次元に集約しようとしている。この作品が死から始まることが適切ではないという批判を予想するロレンツォは、「アリストテレスによれば、消滅は生成されるものの始まりであり、[...]あるものの終わりは、即、別のものの始まりである」と述べて、彼自身の作品が死で始まるのが妥当であると主張する<sup>19)</sup>。「ある女人」の生と死は、愛や愛の苦悩についての曖昧で普遍的な認識をロレンツォにもたらした

が、その後、この普遍的な認識は個別の認識、つまり、この上なく甘美な愛の苦悩という認識へと変化する。彼は町で催された祭典で出会った魅力的な容貌の婦人に心を奪われるのである。亡くなった女人は、彼の目には、ラテン人に「Lucifer」（「光をもたらすもの」の意で《暁の明星》）と呼ばれたウェヌスの星と映る。このようにして、より強い光の太陽がやって来ると消え失せる《暁の明星》となった「ある女人」の死は、作者に「我が婦人」の目という新たな太陽を与えた日の始まりとしてふさわしいという結論が得られるのである。彼は哲学思想を盛り込んだ作品として、『我がソネットの註釈』を構築することを目指しているが、この作品を貫いているのは「生である死」という概念であり、それはネオプラトニズムにおける愛の奇跡を支える基点である<sup>20)</sup>。

次に挙げる第8章のソネット *Quel che 'l proprio valore e forza eccede* とその註釈には、古代ギリシャや同時代の哲学者の著述が反映されている。

Quel che 'l proprio valore e forza eccede,  
folle è sperar o disiar d'avere.  
S'alcun tien l'occhio fisso per vedere  
il sol, né quel né altra cosa vede.  
S'egli è vero el pensier d'alcun che il crede,  
l'alta armonia delle celeste spere  
vince e mortali orecchi; né volere  
sì dee quel che altri con suo danno chiede.  
Ah, folle mio pensier!, perché pur vuole  
giugner pietate alle bellezze oneste  
della mia donna, agli occhi, alle parole?  
Suo parlar men che l'armonia celeste  
non vince, o il guardo offende men che il sole:  
or pensa se pietà s'agiugne a queste!

己の力を超えるものを手に入れようと切望し期待するのは、向こう見ずなこと。もし誰かが太陽を見ようと目を凝らせば、太陽だけでなくその他のものも見えない。もしある者が信じているあの見解が真実だとしたら、天球の調和の大音響は死すべき定めの人間の耳を打ち負

かす。求めると己を損なうことを、人は切望すべきではない。

ああ、我が知性は何と向こう見ずなのだ！何故ひたすら我が婦人の高貴な美、目、言葉に慈悲が加わるようにと望むのだ？彼女の言葉は妙なる天上の調和にもまさり、彼女のまなざしは太陽より害をもたらす。さあ、これらに慈悲が加わるかどうか考えてもみるがよい！

ここでは、「armonia」、「celeste」、「folle」、「giugner」(«s'agiugne»), «pensier», «pietate」(«pietà»), «sole」(«sol»), «vedere」(«vede») のような語が繰り返されている。ソネットにおいてロレンツォの嗜好や美的感覚を示すのは、鍵となる語、テーマとなるような言葉の回りをいとおしむように巡って、詩行を紡いでいることである。

作者がここで示すのは、人間が自分たちにとってこの上なく由々しい害になるかもしれないことを切望し、獲得不可能なものを期待するように突き動かすのは、思ひ上がりと無知であるという見解である。「哲学者たちによれば、それ（無知）こそがすべての過ちの原因である」という一節には、プラトンが『法律』で述べている犯罪の原因と無知との関係が反映されている<sup>21)</sup>。

ロレンツォは、己の力を超えたものを手に入れようと切望し期待することが、いかに不相応であるかを示すために、おこがましくも「太陽」を凝視しようとしていた彼の目に言及する。彼は「我が婦人」を「太陽」に準えているが、愛する者の心の目の弱さは、煌煌と輝く美に耐えられないというトポスは、ダンテの『饗宴』の詩行に認められる<sup>22)</sup>。次にロレンツォは、ある哲学者たちの説として、人間の耳は、天球の甘美な調和の余りにも大きい音を聞くのに十分な能力を持たないと述べる。彼は目や耳への言及に続けて、「我が婦人」の慈悲が加わることを切望していた自身の知性の過ちは、一層由々しきもので、自惚れは一層重大であったと述べる。

このソネットでは、作者は「我が婦人」を認識するものとして、知性、目、耳だけを想定し、その他の力や感覚については言及していない。その理由は、「プラトン学徒によると、賞讃される真の美には3種類、つまり、魂の美、



身体的美、声の美がある。魂の美を認識し欲求し得るのは知性だけで、身体的美は目だけが、声の美は耳だけが享受することが出来る」からである<sup>23)</sup>。このロレンツォの一節には、フィチーノが『饗宴註釈』で述べている次の見解が反映されている。

さて、美には3種類、つまり、魂の美、身体的美、声の美がある。魂の美は知性によってのみ、身体的美は目によって、声の美は耳によってのみ認識される。知性、視覚、聴覚は、我々がこれらによってこの美を享受し得る唯一の手段であり、愛とは美を享受したいという渴望であることを考慮すると、愛は常に知性、視覚、聴覚によって満足するのである<sup>24)</sup>。

上述の「愛とは美を享受したいという渴望である」は、プラトンによる愛の定義であるが、フィチーノの『饗宴註釈』で繰り返され、ロレンツォも「愛の真の定義がいかなるものかを丹念に探求する者ならば、それが美への渴望に他ならないことを見出す」と述べている<sup>25)</sup>。この作品の中で愛に関する諸々の問題提起は、広範囲にわたる学術的思想という構成の枠に縁取られているのである。

次に挙げるのは、第22章のソネット *Ponete modo al pianto, occhi mia lassi* である。

«Ponete modo al pianto, occhi mia lassi:  
presto quel viso angelico vedrete!»  
«Ecco, già lo veggiam». «Perché piangete?  
Perché nel petto il cor pavido stassi?»  
«Miseri noi, che, se fiso mirassi,  
fermando in noi le vaghe luci e liete,  
il nostro bavalischio o faria priete  
di noi, o converria l'alma espirassi!»

«Dunque qual disio face a voi, qual sorte,  
 e temere e voler quel vi disface?  
 Chi muove o scorge il passo lento e raro?».  
 «Natura insegna a noi temer la morte,  
 ma Amor poi mirabilmente face  
 suave a' suoi quel ch'ad ogni altro è amaro».

「疲れ果てた我が目よ、もう泣くのを止めるがよい。まもなく、あの天使の顔を見るのだから!」「ええ、もうその顔を見えています。」「では何故、涙を流すのだ? 何故、心は胸の中で怯えているのだ?」「何と哀れな我々よ、もし我らのバヴァリスキオがあのかい美しい目を我々に注いでじっと見詰めたら、彼女は我々を石にするでしょう、あるいは、魂が抜け出てゆくのは必定でしょう!」

「それでは、いかなる欲望、いかなる運命が汝らを滅ぼすものを汝らに恐れさせ、欲しがらせるのだ? 誰がこの稀な遅い歩みをさせ、同伴しているのだ?」「自然は我々に死を恐れるように教えます。しかし、驚嘆すべきことには、愛神は他のすべての者にとって苦いものを、その信奉者たちにとっては甘美なものにするのです。」

このソネットで「我が目」は自らを滅ぼすものを欲しているが、このテーマはダンテの詩行「*de li occhi, c'hanno di lor morte voglia*」(「彼らの死を望む目の」*Vita Nuova*, XV, *Ciò che m'incontra, ne la mente more*, v. 14) から着想を得たと考えられる<sup>26)</sup>。そして、1行目の「*Ponete modo al pianto, occhi mia lassi*」は、ペトルカカの詩行(*Canzoniere*, 14, *Occhi miei lassi, mentre ch'io vi giro*, v. 1) を想起させるものである<sup>27)</sup>。このソネットに登場する「バヴァリスキオ」(«*bavalischio*»: «*basilisco*») は、古代ローマの動物学においては恐ろしい妖術の力をもつ爬虫類のような怪獣であるが、作者は意中の婦人を「我らのバヴァリスキオ」と表現している。

ロレンツォは、人間のあらゆる行為は苦悩が関わらずに完全に立派で甘美であることはないが、それは恋愛のような情念と渴望が支配する事柄において、とりわけ、認識されるという見解を示し、その理由として「愛とは高貴

な情念（＝苦悩）に他ならない」ことを挙げる<sup>28)</sup>。

彼がまず提示するのは、人間の運命は天上の神の意のままであるというホメロスの見解である。ロレンツォの叙述によると、ゼウスはこの世の人間の各人にふさわしい運命を送るために2個の巨大な瓶を備えているが、その片方は逆境や不幸に満ちており、別の瓶には幸運と不運とが無造作に混在している<sup>29)</sup>。ゼウスが誰かを不幸にしたい時には、不運だけが入っている瓶から送り、誰かを幸せにしてやりたい時には、別の瓶から取り出して送るのだが、そこには不運と幸運とが混ざっている。ロレンツォによると、それは人間というものはひとかけらの幸せもなく容易に不幸せになり得るが、苦悩なしに幸せになることは決してあり得ないということを示すためなのである。

ここで認められるのは、論述において均整のとれた形を追求するというロレンツォ独特の手法である。彼はホメロスの権威のみに依拠するのではなく、別の証拠を提示することで均衡を保とうとする。彼は、もし神の如きと呼ばれたホメロスの権威が、このような真実の見解を証明するのに十分ではないとしても、人間の営みによる経験がこのことの豊富な証言となると主張する。彼の見解によると、愛に関してだけでなく人間に起こるさまざまな事柄は、人間そのものに起因するもので、それは経験を通して認識されるのである。彼は幸福と不幸が屢々、結び付き混ざり合っている理由を示そうとする。古代ギリシャから中世を通じて受容されてきた医学の理論に依拠して、彼は「この世に生きとし生けるものは対立するもので構成されており、各種の体液の対立によって生きている」と述べる<sup>30)</sup>。そして精神や知性と対立・敵対するものとして人間が持っている感情や肉体的な諸々の情念に関して、ある情念が別の情念と逆であるのは、殆どの場合、諸々の情念は人間を構成する各種の体液に起因するので必然的に互に正反対であることに因ると、彼は主張するのである。人間の体質や気質が人体の組織中に存在する体液によって決定づけられるという概念は、当時の人々にとって経験的に納得できるものであり、ここにも経験を重視するロレンツォの姿勢が認められる。

彼は、愛する者たちの惨めさの理由として、人間のすべての営みに付随する不運の混在という共通の運命のみならず、愛の最大の甘美さが、他の人々がこの上ない不幸と呼ぶものの中に存することを挙げる。上述のソネットの「愛神は他のすべての者にとって苦いものを、その信奉者たちにとっては甘美なものにする」は、フィチーノの『饗宴註釈』の次の一節を想起させる。

プラトンは愛を苦いものと呼んでいるが、それは尤もなことである。何故なら、誰であれ、愛する者は死ぬからである。またオルペウスは、愛を甘くて苦い果実と呼んでいるが、これも愛が自ら望んだ死だとするならば、死であるから苦いもの、自ら望んだのであるから甘いものである<sup>31)</sup>。

この章の註釈では、筋の展開は本質的には帰納的であり、経験・実践から理論へ、例示から一般的な概念へと繰り広げられている。ロレンツォは古典文学、哲学、医学の知識などから取り入れたものに自己解釈を加えて、独特の仕方で論述を展開させているのである。

彼は『我がソネットの註釈』において、フィレンツェの俗語文学の伝統との繋がりを自覚した上で、古代ギリシャ以来、先人たちが積み上げてきたものを摂取して活用している。哲学、文学、自然科学などの要素が幾重にも層をなしているが、それはこの作品を豊かにすると同時に複雑にしている。ザナートは、哲学に関して作者の独創性の欠如を非難することは、この作品の特徴やその目的を歪曲するだけでなく、ここで支柱の役割を果たしている文化全体を歪んだ光のもとに置くことになる、含蓄ある指摘をしている<sup>32)</sup>。

哲学や文学などの伝統と同時代の文化的思潮から着想を得たものが、この作品の構成に厚みと密度を与え、多様な効果を生じさせているが、それは作者の構想力を示すものである。個々の事柄は作者独特の解釈の才能によって補完し合い、普遍的な次元の中で豊かになっている。彼の独創性は、広範囲

にわたる分野のさまざまな題材から摂取したものを自在に展開させる独自の方法の中に存するのである。

### 3. 俗語擁護の背景

『我がソネットの註釈』の作者はフィレンツェ共和国の実質的な統治者で、ロレンツォ・イル・マニーフィコと呼ばれていた人物である。次に挙げる第10章のソネット *Se tra li altri sospir' che escon di fore* とその註釈には、1478年4月26日に起きたパッツィ家の陰謀とそれに続く苦難の時期が語られている<sup>33)</sup>。

Se tra li altri sospir' che escon di fore  
del petto, come vuol mia dura sorte,  
Amor qualcun ne mischia, par che porte  
dolcezza alli altri e riconforti el core.  
Quel viso, che col vago suo splendore  
ha già li spirti e le mie forze estorte  
più volte delle avare man' di morte,  
ancora aiuta l'alma che non more.

Fortuna invida vede quei sospiri  
che manda Amor dal core, e li comporta,  
credendo che s'aroga a' miei martiri:  
così la inganno e folla manco accorta,  
se avvien che Amore a lacrimar mi tiri;  
né sa quanta dolcezza il pianto porta.

もし、我が過酷な運命が欲するままに胸から出てくる別の溜め息のなかに、「愛神」が幾ばくかの溜め息を混ぜたら、それは別の溜め息に甘美さをもたらし、心を慰めてくれよう。その美しい輝きで、既に我がスピリトゥスと力を奪い取ったあの顔は、魂が死を免れるように、幾度も貪欲な死の手から救ってくれている。

嫉妬深い「運命の女神」は、「愛神」が心から送り出すその溜め息を見ても、我が苦悩が増していると信じ、大目に見ている。だから、もし「愛神」が私を涙に暮れさせることがあっても、私は彼女（「運命の女神」）

を欺いて彼女に気づかれないようにするので、彼女は涙がどれほどの甘美さをもたらすかを知らない。

パッツィ家の陰謀は、15 世紀後半のフィレンツェ社会を震撼させた事件であり、ロレンツォは最大の危機と試練に立たされた。彼は「序」で、青年期に公然たる迫害を受け運命に苦しめられたので、少々の慰めは拒絶されるべきではないし、その慰めを情熱的な愛や詩の創作と註釈に見出してきたと語り、少なくとも同情の念がこの作品の執筆を正当化してくれる筈であると述べている<sup>34)</sup>。

この陰謀の背景には、野心的な教皇シクストゥス 4 世の存在がある。勢力を拡大しようとした教皇庁とフィレンツェとの関係は陰悪になり、フィレンツェはヴェネツィアやミラノと同盟を締結し、シクストゥス 4 世はナポリ王国と同盟を結んだのである。教皇はメディチ銀行が握っていた教皇庁での特権をパッツィ銀行へ移したが、それによってメディチ家とパッツィ家は激しく対立するようになる。フランチェスコ・デ・パッツィはメディチ家兄弟暗殺の周到な計画を立て、サルヴィアーティ大司教もこれに加担した。フィレンツェ大聖堂でロレンツォに手傷を負わせ、彼の弟ジュリアーノを殺害し、政庁を占拠した首謀者たちは、「民衆と自由！」と叫んで民衆を煽動し、反メディチの暴動を起こさせようとした。しかし、彼らから返ってきたのは、「球！球！」という叫びであった。「球」はメディチ家の紋章である。政治と文化が密接に結びついていた時代に、民衆の支持に支えられて政権を維持してきたメディチ家の当主の言語政策の背景に、彼らの支持を一層強固なものにしようとする意図があったのは事実であろう。

陰謀加担者に対するロレンツォの報復の苛烈さは、裏で操っていたシクストゥス 4 世を激怒させ、教皇はロレンツォとフィレンツェに対して破門という措置をとったのである<sup>35)</sup>。さらに教皇はフィレンツェに宣戦布告したが、これに同調したナポリ王国はフィレンツェ領内に侵攻し、ロレンツォはこの

上なく強大な権力者たちから耐えがたい迫害を受けることになる。教皇から破門されたロレンツォは、「神の慈愛と寛容が日々、私に与えて下さったものを除けば、いかなる助言も援助もない」状態に陥る<sup>36)</sup>。ここで彼は事態を打開するため、単身、ナポリへ赴き、ねばり強く王を説得し、遂にナポリの軍隊を引き揚げさせることに成功し、フィレンツェに帰還するのである。

さて、ナポリ王国とロレンツォとの繋がりを示すものとして、イタリア語史において注目に値するのは、1477年に彼が後のナポリ王、アラゴン家のフェデリーコに贈呈した『アラゴン詞華集』(Raccolta Aragonesa)と、この選集に添えられた「献呈の辞」(Epistola)である<sup>37)</sup>。「俗語人文主義」が実現する過程において重要な意味を持つ「献呈の辞」には、『我がソネットの註釈』の「序」に表明されたロレンツォの言語観と共通のものが含まれている。外国の王家に宛てられた格調高い「献呈の辞」には、トスカーナ語で創作した詩人たちの名が列挙され、フィレンツェの文化的優越性が誇示されている。「献呈の辞」と「序」に共通するのは、トスカーナ語への賞讃であるが、後者の場合には、ロレンツォは別の視点から自身の主張を繰り広げ、俗語対ラテン語という捉え方をして、「母語」について複雑に詳細に論述している。

「序」の中で、ロレンツォは俗語に威厳や高い完成度をもたらす条件を列挙する。その第1は「語彙が豊富で、感情や概念を十分に表現するのに適している」こと、その第2は「優美さと調和」、その第3は「ある言語で人生にとって必要で重大で微妙な事柄が書かれている時」である<sup>38)</sup>。そして第4の条件は、歴史的、政治的考察に根拠を置いたロレンツォの見解である。彼はローマ帝国の繁栄と拡大がラテン語を普及させたことを念頭において、「これは、事の成り行きが、本来ならひとつの町あるいは地方に固有であるところのものを、全世界にほぼ共通で普遍のものとするような状況が醸し出される時である」と述べる<sup>39)</sup>。そして、次の一節で表明されるのは、「序」の論

述の中で最も重要な構成要素のひとつである明白な政治的主張である。

さらにこの言語で今後、読むに値する重要で明晰な事柄が書かれるであろう。その主な理由は、今のところはこの言語は思春期にあると言えるが、今後ますます洗練され優雅になっていくからである。そして青年期、成年期には、さらに高い完成度に容易に達し得るであろう。フィレンツェ帝国に繁栄と強大な力が付け加えられることで、それだけ一層そうなるであろうが、それにはただ期待するだけでなく、善良な市民たちによって才知を傾け全力を尽くして助力がなされるべきである<sup>40)</sup>。

国家の言語という政治的な概念は、ロレンツォの言語政策を端的に示すものである。ラティウムと呼ばれた土地の言葉が、古代ローマ帝国の版図の拡大と共に当時の共通語になったように、彼の母語も「フィレンツェ帝国」の繁栄と共に羽ばたくことを、彼は願っていたに違いない。タヴォーニは「《フィレンツェ帝国》の繁栄に繋がるトスカーナ語の運命」という発想が、「1492年の『カステーリャ語文法』の中で、ネブリハによって理論化された《帝国の伴侶としての言語》という概念の源である」とするリーコの見解を紹介している<sup>41)</sup>。

イタリア語史を研究する上で必読書とされる著書において、ミリオリーニは15世紀の言語状況について、「詩にせよ、散文にせよ、俗語で書く者がいなかったわけではないが、配慮や愛情、芸術という意識をもって俗語に専念する者がいなかった」と指摘している<sup>42)</sup>。ここで注目すべきことは、ロレンツォが「人々や題材にとってこの言語（俗語）が不十分であるというよりはむしろ、この言語に欠けているのは、専心して用いる人々であると結論づけよう」と述べていることである<sup>43)</sup>。彼は俗語の本質に問題があるのではなく、それを用いる人間の側に問題があると看破しているのである。彼は「ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョ、フィレンツェの我々の詩人たちは、この言語で



ありとあらゆる内容が表現され得ることを、彼らのこの上なく優美で荘重な詩や雄弁において、いとも容易に極めて明確に示した」と述べているが、自ら率先して俗語による創作を実践した<sup>44)</sup>。ロレンツォは母国の偉大な先人たちに倣って、哲学、神学、文学などの広範囲にわたる内容を、俗語によって表現しようと努めた。それだけではなく、彼は周辺の権威ある人文学者を巻き込んでその言語政策を遂行した。フィチーノはロレンツォの勧めによって、『饗宴註釈』をラテン語から俗語に翻訳している。

ロレンツォは、古典への造詣の深さでは当代随一とされていたポリツィアーノに、フィレンツェ共和国の国家的行事を祝う俗語作品を委託した。ロレンツォの弟を主人公とする『ジュリアーノ・ディ・ピエロ・デ・メディチ殿の騎馬試合のためのスタンツェ』(*Stanze per la giostra del Magnifico Giuliano di Piero de' Medici*) は、イタリア語史に重要な局面を開くことになる。ロレンツォは1475年1月29日、サンタ・クロチェ広場で、その前年にヴェネツィア、ミラノ、フィレンツェ間で締結された25年間の平和を保証するはずの協定を祝うために騎馬試合を催したが、ジュリアーノはここで勝利の栄冠を得ていたのである。

ポリツィアーノは『イーリアス』をギリシャ語からラテン語へ翻訳している最中であつたが、それを中断して創作に取り組み始めた。彼が細心の配慮、言語への愛、俗語による韻文も芸術であるという意識をもって、この作品に着手した1475年に、「詩のない世紀」と評されている100年間に終止符が打たれるのである<sup>45)</sup>。ミリオリーニが指摘しているように、「より円熟したこの経験を活かして俗語は甦り、俗語人文主義と呼ばれてきたものが勝利を収める。ロレンツォ・デ・メディチとポリツィアーノによって、フィレンツェは再び文学と言語との高い総合に到達する」のである<sup>46)</sup>。このようにして俗語は文化を伝える言語として再生し、次の世紀にはこの言語のための文法について論じられ、「言語問題」が浮上し、その論争は19世紀まで継続することになるのである。

#### 4. 結論

作者は『我がソネットの註釈』の「序」で表明したように、愛を主題とする「我がソネット」の註釈において、哲学、文学、自然科学など広範囲に及ぶ内容を母語によって表現し、この俗語の豊かさを実証し、俗語擁護という目的を果たしている。

この作品は同時代の人文学者から哲学的な作品と看做されているが、ここには作者自身による思想の体系化は認められない。この時代のフィレンツェは古典文化の摂取に多大なエネルギーを傾注していたが、彼は哲学の分野において際立った興味を喚起していたテーマにさまざまな角度から触れ、自己の主張の拠り所として哲学者たちの見解を取り入れている。彼の関心の幅の広さは哲学、科学、恋愛、文学、詩の批評、芸術一般と広範囲に及んでいる。彼は深い洞察と生き生きした批判精神をもって論述を繰り広げ、個人的な視点を普遍的な概念によって強固なものにしようとしている。古代ギリシャ以来の哲学や文学などから取り入れたものが幾重にも層をなしているが、これらを摂取し活用する手法そのものに、作者の独創性が認められる。

彼の俗語擁護の熱意の根底にあるのは、生まれ故郷の母語に対する深い愛であるが、彼に歴史的俯瞰に基づいた言語政策を推進させたのは、政治的な動機であった。彼は、実質的に統治する「フィレンツェ共和国」の民が分断されていることに対して危機感を抱いていたに違いない。ラテン語、ギリシャ語を駆使する人文学者がいる一方で、大多数の者は古典語による著作とは無縁な世界にいたのである。

ロレンツォは俗語そのものに欠陥があるのではなく、俗語を用いることに専念する者が不足していると主張し、このような言語観に基づいて、専ら俗語で創作した。彼は古代ギリシャ以来の先人たちが築いてきた知の遺産から縦横無尽に摂取したものを、俗語で表現してみせたのである。15世紀は俗語のみならずひとつの文明が危機に陥っていた時代であったが、彼にとって俗語で創作することは、己の存在理由の追求であったと思われる。彼は「俗

語人文主義」の担い手として多大な貢献をし、古典の教養を取り入れながら、権威ある人文主義者たちを巻き込んで、俗語擁護のための企てを推進したのである。

『我がソネットの註釈』は15世紀後半という時代そのものの感受性を伝えており、ここには政治と文化と芸術の結合が認められ、フィレンツェ文化の多様性が浮き彫りにされている。この作品には、ひとつの文明が自己の刷新を模索していた時代の社会の諸相や言語状況を証言する書としての意義が認められるのである。

## 註

本稿で引用の際に用いるテキストは次のように略記する。

*Comento* = Lorenzo de' Medici, *Comento de' miei sonetti*, a cura di P. Orvieto, in Id., *Tutte le opere*, t. I, Roma, Salerno Editrice, 1992, pp. 323-531.

*Proemio* = Lorenzo de' Medici, *Proemio al Comento de' miei sonetti*, cit., pp. 353-372.

- 1) *Proemio*, p. 370: «nessuno mi può riprendere se io ho scritto in quella lingua nella quale io sono nato e nutrito». ミリオリーニは、クワットロチェントにおいて俗語が陥っていた状況を、「危機」と捉えている。優雅に創作したいと願う者はラテン語で書き、俗語は使用されていたものの、殆ど誰も優雅さに配慮せず、文学語として蔑視されていたと述べている。Cfr. B. Migliorini, *Storia della lingua italiana*, Firenze, Sansoni, 1960, pp. 251-253. この「俗語の危機」は文学のみならず、もっと広範囲に及ぶものであり、ネンチョーニが指摘しているように、それは古典古代やその言語に回帰しつつも、己自身の刷新を模索していたある文明全体の危機の必然的な反映であった。Cfr. G. Nencioni, *Un caso di polimorfia della lingua letteraria dal sec. XIII al XVI*, in Id., *Saggi di lingua antica e moderna*, Torino, Rosenberg & Sellier, 1989, pp. 11-188 (alle pp. 62-63).
- 2) Cfr. *Proemio*, p. 355.
- 3) ここに反映されているのは、プラトンの一節「われわれひとりひとりの生まれつきは、けっしてお互いに相似たものではなく、自然本来の素質の点で異なっていて、それぞれが別々の仕事に向いている」（プラトン、『国家』、藤沢令夫訳、東京、岩波書店、1976年、II, 370B）である。人々の共同体への貢献に関しては、アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、神崎繁訳、東京、岩波書店、2014年、VIII, 13, 1163bを参照のこと。
- 4) Cfr. *Proemio*, p. 357.

- 5) *Proemio*, p. 354: «e commenti sono riservati per cose teologiche o di filosofia e importanti grandi effetti, o a edificazione e consolazione della mente nostra o a utilità dell'umana generazione».
- 6) Cfr. T. Zanato, *Saggio sul «Comento» di Lorenzo de' Medici*, Firenze, Olschki, 1979, p. 44. ロレンツォの俗語擁護論に関しては、「3. 俗語擁護の背景」において詳述することにした。
- 7) *Proemio*, p. 370: «sentenzia di Platone che il narrare brevemente e dilucidamente molte cose non solo pare mirabile tra gli uomini, ma quasi cosa divina».
- 8) *Proemio*, p. 371: «ne' versi latini sia molto maggiore libertà che non è ne' versi volgari, perché nella lingua nostra, [...] concorre ancora questa difficoltà delle rime, la quale, come sa chi l'ha provato, disturba molte e belle sentenzie, né permette si possano narrare con tanta facilità e chiarezza».
- 9) *Proemio*, p. 372: «come dice Ovidio di Fetonte, [...] mi basta aver tentato quello stile che appresso e vulgari è più eccellente». ここで示唆されているのは、『転身譜』(II, 327-328) のパエトンの墓石の碑銘「ここに眠るはパエトン、父の車駕を操る御者 / 力及ばず墜落、然れども大いなる企てに挑戦」である。Cfr. Publio Ovidio Nasone, *Le Metamorfosi*, introduzione di G. Rosati, traduzione di G. Faranda Villa, note di R. Corti, testo latino a fronte, Milano, Rizzoli, 1995, vol. I, p. 122.
- 10) Cfr. A. Poliziano, *Nutricia in Poesie di Angelo Poliziano*, a cura di F. Bausi, Torino, UTET, 2006, p. 754. ポリツィアーノがこの作品を完成した 1486 年には、ロレンツォは註釈を施したソネットでまとめた作品を作り上げようとしていたことが窺われる。Cfr. P. Orvieto, *Nota introduttiva*, in *Comento*, pp. 325-352 (alle pp. 325-326).
- 11) *Ioannes Picus Mirandula Laurentio Medico s. p. d. in Prosatori latini del Quattrocento*, a cura di E. Garin, Milano-Napoli, Ricciardi, 1952, pp. 796-805 (a p. 802): «lego tamen apud te ut nova, ut meliora».
- 12) *Sopra lo amore o ver' Convito di Platone: Comento di Marsilio Ficini Fiorentino sopra il Convito di Platone*, a cura di G. Ottaviano, Milano, Celuc, 1973. この他に、M. Ficino, *El libro dell'Amore*, a cura di Sandra Niccoli, Olschki, Firenze, 1987 を参照。
- 13) Cfr. G. Ottaviano, *Nota introduttiva*, in Ficino, *Sopra lo amore...*, cit., pp. 7-8 (a p. 8).
- 14) Ficino, *Sopra lo amore...*, cit., *Proemio*, p. 9: «Finalmente ne' nostri tempi il famosissimo Lorenzo de' Medici, volendo il Platonico convito rinnovare, la cura di esso a Francesco Bandini commesse».
- 15) Cfr. *Ibid.*, *Proemio*, p. 9.
- 16) *Ibid.*, VII, 1, p. 129: «Conclusioni di tutte le cose dette, con la opinione di Guido Cavalcanti filosofo [...] Costui con gli suoi versi brevemente conchiuse, ciò che da voi di Amore

è detto».

- 17) オッタヴィアーノはこの顕著な隔たりに注目し、フィチーノはプラトンの単なる註釈者ではないと述べ、フィチーノにおいては、プラトンのエロスはネオプラトニズムの伝統とキリスト教によって豊かになっていると指摘している。Cfr. Ottaviano, *Nota introduttiva*, in Ficino, *Sopra lo amore...*, cit., pp. 7-8 (a p. 7).
- 18) *Proemio*, p. 357: «mettendo per al presente da parte quello amore, el quale, secondo Platone, è mezzo a tutte le cose a trovare la loro perfezione e riposarsi ultimamente nella suprema bellezza, cioè Dio; parlando di quello amore che s'estende solamente ad amare l'umana creatura».
- 19) *Comento*, p. 374: «secondo Aristotele, la privazione è principio delle cose create [...] quello che è fine d'una cosa, immediate è principio d'un'altra». アリストテレス、『自然学』、出隆、岩崎允胤訳、東京、岩波書店、1968年、I, 7, 190b-191aを参照のこと。
- 20) この作品中では、愛する者の心の「逃亡」、愛する者と愛される者の心の「交換」、恍惚状態の愛する者が愛される者へ「変容」する様子、「浄化」された愛する者に対して愛に応えた婦人が示す「慈悲」が描写されている。
- 21) *Comento*, p. 402: «la quale, secondo e filosofi, è madre di tutti e mali». これに関しては、プラトン、『法律』、森進一、池田美恵、加来彰俊訳、東京、岩波書店、1976年、IX, 863Cを参照のこと。
- 22) ロレンツォは第6章の註釈で、「ダンテが述べているように、彼女の美は《弱い視力に対する太陽の光のように、我々の知性を圧倒する》」（*Comento*, p. 397: «le bellezze sue, come dice Dante, “soverchiono lo nostro intelletto, come raggio di sole in fraile viso”»)と、ダンテの詩行（*Convivio*, Canzone II, *Amor che nella mente mi ragiona*, vv. 59-60）から引用している。Cfr. D. Alighieri, *Convivio*, a cura di G. Fioravanti, Canzoni a cura di C. Giunta, in Id., *Opere*, vol. II, Milano, Mondadori, 2014, p. 348. プラトンは「そして太陽の光のもとまでやってくると、目はぎらぎらした輝きでいっぱいになって、いまや真実であると語られるものを何ひとつとして、見るができないのではなかろうか？」（プラトン、前掲『国家』、VII, 516）と述べているが、オルヴィエートは、ロレンツォがこの「洞窟の比喩」に言及している可能性を示唆している（cfr. *Comento*, p. 401, n. 149）。プラトンは政治と哲学は不可分な関係にあるとして両者の統合を模索したが、彼の著作の中で15世紀のフィレンツェで最初に翻訳された『国家』は、当時の知識人たちに熱狂的に研究され、白熱した議論を巻き起こしたとされている。Cfr. Zanato, *Saggio sul «Comento» di Lorenzo de' Medici*, cit., p. 111.
- 23) *Comento*, p. 403: «Secondo li platonici, tre sono le spezie della vera e laudabile bellezza: cioè bellezza d'animo, di corpo e di voce. Quella dell'anima può solamente conoscere e

apetire la mente; quella del corpo solamente diletta gli occhi; quella della voce gli orecchi».

- 24) Ficino, *Sopra lo amore*..., cit., pp. 16-17: «Adunque di tre ragioni è la bellezza: cioè degli animi, de' corpi, e delle voci. Quella dello Animo con la Mente sola si conosce: quella de' corpi con gli occhi: quella delle voci non con altro che gli orecchi si comprende. Considerato adunque, che la Mente e il vedere e lo udire son quelle cose, con le quali sole noi possiamo fruire essa bellezza, e lo Amore di fruir la bellezza desiderio sia, lo Amore sempre de la mente, occhi e orecchi è contento».
- 25) *Proemio*, p. 357: «chi cerca diligentemente quale sia la vera diffinizione dell'amore, trova non essere altro che appetito di bellezza». このプラトンの定義に関しては、プラトン、『饗宴』、鈴木照雄訳、東京、岩波書店、1974年、204B-D、あるいはプラトン、『パイドロス』、藤沢令夫訳、東京、岩波書店、1974年、237Dを参照のこと。
- 26) D. Alighieri, *Vita Nuova*, introduzione di G. Petrocchi, nota al testo e commento di M. Ciccuto, Milano, Rizzoli, 1989<sup>2</sup> (1<sup>a</sup> ed. 1984), XV, p. 144.
- 27) F. Petrarca, *Canzoniere*, a cura di M. Santagata, Milano, Mondadori, 2004, p. 62.
- 28) *Comento*, p. 462: «Amore non essere altro che una gentile passione».
- 29) 『イーリアス』(XXIV, 527-533)では、片方の瓶には禍、別の瓶には幸いが容れてあり、ゼウスがその両方を混ぜて与える者は、時には不幸に遭うものの、時には幸せになれるが、ゼウスが禍だけを与える者は侮蔑される者になると語られている。Cfr. Omero, *Iliade*, prefazione di F. Codino, versione di R. Calzecchi Onesti, Torino, Einaudi, 1950, pp. 870-871.
- 30) *Comento*, pp. 460-461: «tutte le cose che vivono al mondo constare d'oppositi e vivere per contrarietà d'umori».
- 31) Ficino, *Sopra lo amore*..., cit., II, 8, p. 33: «Platone chiama l'Amore amaro, e non senza cagione, perchè qualunque ama, muore amando: e Orfeo chiama l'Amore un pomo dolce amaro. Essendo l'Amore volontaria morte, in quanto è morte, è cosa amara: in quanto volontaria, è dolce».
- 32) ザナートは、哲学的主題の多岐にわたる幅の広さは、フィチーノ、ピーコ、ランディエーノなどルネサンス期の思想家たちに典型的な特徴であり、『我がソネットの註釈』における哲学上の体系化の欠如は、この時代の文化的風土の中に存すると指摘する。ロレンツォが目指したのは、思想に基礎を置く作品ではなく、それどころかその逆であり、ある文化を自分自身のソネットに適用することであったという見解を示している。Cfr. Zanato, *Saggio sul «Comento» di Lorenzo de' Medici*, cit., p. 136.
- 33) オルヴィエートは、このソネットはテンツォーネに属すると指摘しているが、これにはアンジェロ・ポリツィアーノ、ジロラモ・ベニヴィエーニ、パンドルフォ・コッレヌッチョが、ソネットで応えている (cfr. *Comento*, p. 408, nota, 163)。パツツイ

家の陰謀とその後の苦難の時期に関しては、J. Lucas-Dubreton, *La vita quotidiana a Firenze ai tempi dei Medeci*, Milano, Rizzoli, 1996, pp.91-98; I. Montanelli - R. Gervaso, *L'Italia dei secoli d'oro*, Milano, Rizzoli, 1977, pp. 295-298 を参照。

34) Cfr. *Comento*, pp. 363-364.

35) Cfr. *ibid.*, p. 410.

36) *Ibid.*, p. 410: «sanza alcuno consiglio o aiuto, se non quello che dí per dí la divina benignità e clemenza mi ministrava».

37) この選集の編纂は、ロレンツォとポリツィアーノに俗語詩の伝統を明確に再認識させたという点で意義あるものであった。「献呈の辞」の著者同定に関しては、先行研究者たちの間で論議が続いてきたが、ロレンツォとポリツィアーノが創作の場を共有し、実際に草稿を書いたのはポリツィアーノと看做するのが妥当であろう。

38) *Proemio*, pp. 365-366: «l'essere copiosa e abundante e atta ad esprimere bene il senso e il concetto della mente [...] la dolcezza e armonia [...] quando in una lingua sono scritte cose sottili e gravi e necessarie alla vita umana».

39) *Ibid.*, p. 366: «questo è quando el successo delle cose del mondo è tale, che facci universale e quasi comune a tutto il mondo quello che è naturalmente propio d'una città o d'una provincia sola».

40) *Ibid.*, pp. 369-370: «E forse saranno ancora scritte in questa lingua cose sottile e importante e degne d'essere lette; massime perché insino a ora si può dire essere l'adolescenza di questa lingua, perché ognora più si fa elegante e gentile. E potrebbe facilmente, nella iuventù e adulta età sua, venire ancora in maggiore perfezione; e tanto più aggiugnendosi qualche prospero successo e augumento al fiorentino imperio, come si debbe non solamente sperare, ma con tutto lo ingegno e forze per li buoni cittadini aiutare».

41) M. Tavoni, *Il Quattrocento*, Bologna, Il Mulino, 1992, p. 77: «La fortuna della lingua toscana in quanto legata al successo del «fiorentino imperio» [...] la fonte dell'idea della «lingua compaëra del Imperio» teorizzata da Nebrija nella *Gramática castellana* del 1492». タヴォーニは、このリーコの見解の蓋然性に関して否定的である。

42) Migliorini, *Storia della lingua italiana*, cit., p. 251: «Non manca chi scriva in volgare, in poesia e in prosa; manca chi lo coltivi con cura, con amore, con coscienza d'arte».

43) *Proemio*, p. 369: «concluderemo più tosto essere mancati alla lingua uomini che la essercitino, che la lingua agli uomini e alla materia».

44) *Ibid.*, p. 367: «Dante, il Petrarca, il Boccaccio, nostri poeti fiorentini, hanno, nelli gravi e dolcissimi versi e orazioni loro, monstro assai chiaramente con molta facilità potersi in questa lingua esprimere ogni senso».

45) クローチェは、ボッカッチョ没後の 100 年間を「詩のない世紀」と評している。Cfr. B.

Croce, *Poesia popolare e poesia d'arte*, Bari, Laterza, 1967, p. 234.

- 46) Migliorini, *Storia della lingua italiana*, cit., p. 253: «il volgare risorge, approfittando di questa più matura esperienza: trionfa quello che è stato chiamato l'umanesimo volgare. Di nuovo Firenze assurge, con Lorenzo de' Medici e col Poliziano, a un'alta sintesi, letteraria e linguistica».

(つちや はるこ／2015 年度原稿)